

釧路市教育委員会 令和3年第8回4月定例会会議録

- 1 日時：令和3年4月16日（金）13時30分から14時30分まで
- 2 会場：釧路市教育委員会室
- 3 出席者
岡部義孝教育長
（教育委員）
山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員
（事務局）
大坪学校教育部長、津田生涯学習部長、大山教育指導参事、
三富学校教育部次長、早坂学校教育部次長、北澤北陽高校事務長、
工藤生涯学習部次長、高嶋博物館長、
富田総括指導主事、澤口生涯学習課長、
安倍美術館長、中村動物園長、朴音別生涯学習課長
- 4 議事録署名人 山口委員、小出委員
- 5 傍聴人数 0人
- 6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 釧路市立阿寒湖義務教育学校の開校について
- (2) 令和3年度小中学校児童生徒数等の状況
- (3) 令和3年度北陽高等学校入学生等の状況について
- (4) 令和3年度釧路市奨学生の決定について
- (5) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について
- (6) 学校教育指導について
- (7) GIGAサポーターの導入について
- (8) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- (9) 釧路叢書第40巻の発刊について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

(1) 釧路市立阿寒湖義務教育学校の開校について

(大坪学校教育部長)

釧路市立阿寒湖義務教育学校の開校について報告する。4月6日(火)に、阿寒湖義務教育学校が開校した。当日10時より、入学前の新1、7年生を除く児童生徒58名及び教職員他、市長、教育長、前田一步園財団理事長、PTA会長が出席し、開校式を行った。教育長による開校宣言、蝦名市長から校旗の授与が行われている。

同日13時から1年生7名・7年生11名の入学式も行われ、阿寒湖義務教育学校は、全児童・生徒76人での開校となった。

また、新年度より前期課程(1年から6年生、53名)の児童を対象にスクールバスが運行されており、通学の安全を強化している。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

校舎が完成する前に見学させていただいた。その際、当時の阿寒湖小学校の校長より教育課程についても説明を受け、順調にスタートしていくという部分は理解できた。開校して実際に児童生徒が教育活動を行っている姿も是非1度見せていただければと思っている。

(大坪学校教育部長)

日程調整をさせていただいたうえで、そのような機会を設けたい。

【公開案件】報告事項

(2) 令和3年度小中学校児童生徒数等の状況

(3) 令和3年度北陽高等学校入学生等の状況について

(早坂学校教育部次長)

今年度の新入学児童生徒の状況は、小学校1年生は前年より24名少ない1,013名である。また、中学校1年生は、前年より119名少ない1,137名となっている。小学校では前年比2.3%の減、中学校では9%の減となっている。

また、附属釧路義務教育学校前期課程の1年生は58名、後期課程の1年生(7年生)は75名、武修館中学校の1年生は12名となっている。

市立小中学校全体の児童生徒数の動向について、学年別では、小学校6年生と中学校2、3年生で増加となったほかは、全ての学年におきまして減少している。

また、小学生の総計は、前年度より187名減の6,588名で前年比2.7%の減となっており、中学生の総計は、前年度より64名減の3,622名で前年比1.7%の減とな

っている。

特別支援学級在籍児童生徒は、小学校、中学校とも、毎年度増加傾向にあり、小学校で501名、中学校で202名、総計で前年より60名多い、703名で前年比9%の増となっている。

なお、今回の集計は4月1日現在のものであり、今後、学校基本調査等で使用される5月1日を基準とした報告値では、若干の増減が生じることが見込まれる。

平成24年度の児童生徒数を100とした場合の各年度の割合について、小学校、中学校ともに、特別支援学級の児童生徒数は10年前と比較して大幅に増加してきているところであるが、普通学級との合計では年々減少を続けており、令和3年度においては小学校で約20%の減少、中学校で程度の約15%の減少となっている。

(北澤北陽高校事務長)

令和3年度の新入学生数は定員200名に対し、186名となっており、その内36名が推薦、5名が2次募集の合格者となっている。新入学生を含めた4月8日現在の在校生数は625名である。

令和2年度卒業生の進路状況について、進学希望者164名に対し157名が決定し、決定率は95.7%となっている。就職希望者67名に対し66名が決定し、決定率は98.5%である。

なお、進学決定者の学校別内訳及び就職決定者の就職先の地域区分は、資料に記載のとおりとなっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

全体の児童生徒数が減少している中で、特別支援学級に通う子どもが増加している。近年、このような傾向にあるという報告は受けてきているが、困り感のある子どもが増えているというよりも、小学校に入学する前の取り組みも含めて、障がいのある子ども、困り感のある子どもを出来るだけ早期に発見して適切な指導をすることが、子どもの健全な成長が見込め、認知障害も含めて防げるという施策が定着して、保護者の理解も得て小学校1年生から特別支援学級に通う子どもが多くなっているといった、これまでの取り組みの成果が出ている数字として認識してよろしいか。

(早坂学校教育部長)

国で系統的また実証的に正確な分析は行っていないため想定範囲となるが、平成20年代にさまざまな障がい者に係る法律が改正され、発達障害がある子どもに対し特別な支援が必要だという流れになってきた中で、特別学級の図式化が強まったことが一つある。

それに伴い、障がいを持つ児童生徒一人ひとりの状況に応じた個別の指導計画が立てられるということで、保護者も信頼して特別支援学級へ送り込むという傾向が強まってきたので

はないかと思う。

(山口委員)

年度毎に変化がわかる実績値での資料を提示していただいたが、今年度始まるあり方検討委員会では予測値も必要となってくるのではないかと思う。資料がまとまった段階で我々にも提示してほしい。

(早坂学校教育部長)

釧路市まち・ひと・しごと創生総合戦略の中でも年代別で今後の人口推計をたてているので、それら各種統計をもとに児童生徒数の推計を示していきたいと思う。

(松尾委員)

北陽高校の生徒数について、倍率も下がっている。学校が悪くて来ないわけじゃないと思う。地域性の問題、南側の人口が減っているとかバスの利便性などあるかと思うが、学校の魅力をアピールすることが大事だと思う。何か策を練った方がいい。

青陵中学校の保護者宛のメールで、道教委が配信している道内の高校の特色を紹介しているものが送信されている。保護者や生徒はそれを見て、近いからとかではなく自分の目で学校を選択する事ができる。北陽高校の魅力も、そのような配信を利用するなど、生徒に見てもらい選んでもらえるようにしていくことが必要である。

(北澤北陽高校事務長)

令和4年度から単位制が導入されることから、選ばれる学校として北陽高校の魅力のPRに努めていきたい

(種村委員)

最近の傾向では、明輝高校の倍率が上がっていて実力も上がってきていると思うが、本来北陽高校に行ける生徒が明輝高校に流れているということは無いのか。

(北澤北陽高校事務長)

明輝高校に近い地域が児童生徒数も多いことから、通学しやすい高校を選んでいるという部分もあると分析している。

【公開案件】報告事項

(4) 令和3年度釧路市奨学生の決定について

(早坂学校教育部長)

釧路市奨学金貸与制度は、これまでに延べ3,209名、内訳として釧路地区2,494名、音別地区200名、阿寒地区515名に奨学金を貸与している。令和3年度の奨学生の募集人数及び応募状況について、貸付の財源の違いから、釧路・音別地区と阿寒地区の2つの地区に分けて報告する。

まず、高等学校の募集については、釧路・音別地区5名、阿寒地区4名、合計9名の募集に対し、釧路・音別地区で1名の応募があり、阿寒地区は応募がなかった。

高等専門学校の募集については、釧路・音別地区2名、阿寒地区2名、合計4名の募集に

対し、釧路・音別地区で1名の応募があり、阿寒地区は応募がなかった。

専修学校・大学（短大・大学院を含む）の募集については、釧路・音別地区35名、阿寒地区6名、合計41名の募集に対し、釧路・音別地区で36名、阿寒地区に1名、合計37名の応募があり、全体では54名の募集人数に対し、39名の応募となっている。

選考について、先月の3月22日に開催された釧路市奨学審議会において、学業、人物、身体、及び家計の状況などから総合的に審議をいただいた。

選考にあたっては、より多くの応募者へ貸与できるように、応募人数が募集人数に満たない学校区分について審議会の了承を得て予算の範囲内で別の区分に振り替えて、採用人数の調整を行っている。今回は、応募の無かった釧路・音別地区の高等学校の3名分について、募集人数を超えて応募があった釧路・音別地区の専修学校・大学区分の1名分に振り替えて、採用枠を35名から36名に調整し、結果、応募者39名全員が採用となったところである。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

この奨学金は就職後に返済する制度だが、色々な奨学金の制度がある中、返済しなくても良い制度もあると聞いている。高校まで釧路で生まれ育って、大学を札幌や首都圏などに出て学ぶが、地元に戻ってくる人材は少ない。そう言った中で、帰ってきてもらい地元へ貢献するような人材を多くする必要がまちづくりの観点で必要となってくる。

例えば、大学卒業後に釧路市内で就職した場合には、就職先の企業が返済してくれると言った制度構築への働きかけは難しいのか。

（早坂学校教育部長）

市の考えで全ての企業に当てはめるのはなかなか難しいと思うが、一度釧路を出ていった学生たちに戻ってきてもらえるよう、どのように関係性を保ちながら釧路の企業の情報を提供していくか議論した経過はある。

（岡部教育長）

釧路市は貸与型と呼ばれる奨学金であり、一方でU I J ターンの観点も含めて独自で給付型の奨学金制度を持っている市町村がある。給付型については、学力の要件など非常に枠が狭く、総じてハードルは高いため、誰でも貰える制度ではないという実態である。釧路市の貸与型については、今回の結果を見ても借りやすさの面では、給付型奨学金とは違う優位性がある。

（種村委員）

貸与される金額の上限はあるのか。

（早坂学校教育部長）

大学は月額30,000円、高専では月額15,000円、高校では12,000円となっている。

【公開案件】 報告事項

(5) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について

(早坂学校教育部次長)

釧路市コミュニティ・スクールの導入について報告する。コミュニティ・スクールについては、これまで小学校8校、中学校4校の計12校で導入されているが、この度、新たに4月1日付で武佐小学校、阿寒小学校、阿寒中学校の3校において導入を承認したものである。

この3校については、地域や保護者の方々をはじめ、教職員、指導主事で構成する推進委員会において、令和元年度から2年間調査研究を行い、導入準備を進めてきたものであり、特に阿寒小・中学校におけるコミュニティ・スクールは、前年度の導入校の音別小・中学校同様、小中合同で取り組むものである。

令和3年に設定された各校の目指す子ども像は、武佐小学校では、「心輝き 夢拓く 明るく元気な 武佐小の子」となっており、進んで学ぶ子、心優しい子、ねばり強い子の3つの柱である知・徳・体の調和のとれた豊かな成長を目指すものである。

阿寒小・中学校は、「ふるさとへの誇りと愛着を持ち、未来に向かう阿寒の子」となっており、生まれ育ったふるさと阿寒を愛し、将来の社会で活躍する人に育ててほしいという地域の願いの実現に向け、小中9年間の学びを通して、ふるさとを見つめ、ふるさとを学ぶ「ふるさと教育」の充実を図るなど、阿寒小・中学校の子どもたちの未来を応援するものである。

また、阿寒湖義務教育学校については、旧阿寒湖小学校及び旧阿寒湖中学校の「小・中合同コミュニティ・スクール協議会」による協議等を経て、両校のコミュニティ・スクールを引き継ぐ形で、4月1日付で導入を承認したものである。

今後は、各校の1回目のコミュニティ・スクール協議会において、委員となられる方々への辞令書の交付を行うとともに、学校と地域の方々が目指す子ども像に向かって、熟議と協働を重ね、学校運営に地域の声を生かし、特色ある学校づくりを進めるものである。

なお、令和3年度に調査研究を行う学校は、昨年度からの2年目となる湖畔小学校、朝陽小学校、東雲小学校、新陽小学校、芦野小学校、鳥取中学校の6校、また、今年度から清明小学校、青葉小学校、昭和小学校、青陵中学校、山花小中学校の6校となっている。

報告は以上です。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

釧路市のコミュニティ・スクールの導入に向けての、ステップを踏みながら広めているという堅実な取り組みは非常に評価している。他市町村の中には、教育委員会の方から今年度から一斉にコミスクを取り組むといった話も聞いているが、何をやっていけばよいのかわからないなど、導入してから混乱している話もよく聞く。それに比べると釧路市は、研究協力校になって2年間の実績を踏まえて承認していくという形は非常に良い方法だと思うし、こ

れからも進めてもらいたい。

鳥取中学校の推進委員として参加しているが、コロナ禍の関係で従来通りの取り組みが思うように進まない実態がある。2年目なので、今までの流れでいえば令和4年度にコミュニティ・スクールになると思うが、残り1年でどれくらい実績を踏んでいけるか委員としても不安がある。今までのように2年間で導入できるのか、見通しはどのようになっていくか。

(大山教育指導参事)

昨年度、さまざまな取り組みが出来なかったのは、鳥取中学校だけとなっており、他の学校は予定通り進めてきていることから、出来るだけ予定通り進めていきたいと思う。不安がある場合には相談していただいたうえで、延期するなどの対応もしていかなければならないと思う。

(小出委員)

複数の小学校から中学校に進学するので、その中学校との連携や、同じ中学校区の小学校同士の連携を行っていければ、活動も充実し、子どもたちも継続的に恩恵を受けられるので、中学校区内での連携が大事なことだと中央小学校で協議会委員をしていて感じている。

今回、鳥取中学校と新陽小学校が研究校で、鳥取小学校は既にコミュニティ・スクールとなっていて、同じ中学校区内での連携も取れてきているので更に前進するのではないかと考えている。

各校の特色ある取り組みを生かしていくのが大事だと思っている。そうしないと長く続かないと思うし、何をしたいのかわからないという行き詰まりが出てきてしまい、PTAにも浸透していかないのでは、既に導入している学校の事例を導入していく学校に紹介しつつ進めていく必要があると思う。校数は増えるが中身が伴わないということにならないようにしないといけない。

また、各校の繋がりを広げるうえで、新たに地域コーディネーターを導入するという考えはないのか。

(大山教育指導参事)

中学校区内で全ての学校がコミュニティ・スクールとなるよう、まず小学校を指定してから中学校を進めている。併せて現在、コミュニティ・スクールとともに中学校区内での小中連携の取り組みも行っている。これからのコミュニティ・スクールは単独ではなく中学校区として小中連携でどのようなことをやったらいいかといった視点で変わってくると期待しているし、そのように進めていきたい。

(早坂学校教育部次長)

地域コーディネーターについては、必要な人数について予算要求をしていきたい。

(小出委員)

小中連携について、小学校のコミュニティ・スクールに中学校の先生が入ってくると中学校の取り組みを直接伝えられるというメリットがあるので、子どもが伸びる実感がある。

コミュニティ・スクールをやっていて、行き詰った時に、他の学校はどうしているのか参考にしたいということがあって、そういう時に地域コーディネーターが居ると横の繋がりが

持てる。コミュニティ・スクール同士で横の繋がりが持てる仕組みがあった方が良い。

(山口委員)

コミュニティ・スクールが本当の意味で機能できるか、地域コーディネーターが存在しているかということが、非常に大きくかかわってきていると思うので、前向きに考えてもらえたらと思う。

学校のあり方検討委員会がスタートするが、子どもたちにとって望ましい学びの環境作りという点では、コミュニティ・スクールが地域の特色を生かして機能していくということが密接に関係してくる課題だと思う。是非、コミュニティ・スクールを充実させながら進んでいけるよう頑張っていて欲しい。

【公開案件】 報告事項

(6) 学校教育指導について

(富田総括指導主事)

今年度の学校教育指導（学校訪問）について報告する。

学校教育指導は、指導主事の本来業務として位置付けられており、市立学校を訪問し、教育課程や学習指導、生徒指導、その他の学校教育に関する専門的事項について指導・助言を行う大切な機会である。

これまでは、北海道教育委員会が行う学校教育指導の実施要項のとおり、釧路教育局の指導主事とともに、毎年学校訪問を行ってきたが、昨年度はコロナ禍や働き方改革の観点等の理由により、年1回の訪問となった。

そのため、北海道教育委員会が提示している学校訪問以外に、年度の早い時期に学校を訪問し、実態を把握した上で、指導・助言を行っていくことといたし、まずは、一次訪問として、市の指導主事で学校訪問を行うこととした。

この一次訪問の一番の目的は、すべての先生がたの授業を参観することにある。授業を参観した上で、授業改善に向けて、学力向上に向けての具体的な協議を学校と行いたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

例えば、こちらから出向いてということもあるし、学校から助言の要望があったときに行くということだと思うが、人材が不足した時に、教育局に協力を求める事は可能なのか。

(富田総括指導主事)

可能である。具体的な助言については学校に近い存在である市教委の方で行い、道教委が進める大枠の部分は、道教委に示してもらいながら助言してもらおうといった要請もしていきたい。

(種村委員)

教育委員として授業参観の経験をさせてもらっているが、小学校が多くて中学校が少ないと言った印象がある。中学校は授業を参観しにくいなどの状況があるのか。

(富田総括指導主事)

中学校が参観しにくいといった話はない。今回の授業参観についても、全教員の授業を見たいと思っている。小学校は学級担任制なので全クラスを見ると、ほぼ全教員の授業が見ることができるが、中学校は教科担任制なので全クラスを見てもそうならないことから、時間をかけて全教員の授業を参観する。

【公開案件】報告事項

(7) G I G Aサポーターの導入について

(早坂学校教育部次長)

G I G Aスクールサポーター配置業務委託の受託業者については、去る4月5日、公募型プロポーザルにおいて、厳正な審査の結果、釧路市の業者である株式会社ポータスを選定した。

プロポーザルの参加業者は、東京都から2社、埼玉県から1社を含め、計4社が、ウェブ会議により、制限時間30分の中で企画提案説明を行った。

審査はサポーターの人員配置や事業遂行能力、他自治体におけるICTを活用した事業実績、学校訪問の回数、使用操作が分からない時などのサポート対応、業務マニュアル作成など7つの評価項目に対して、審査員7名が各社100点満点の採点により、最多合計点数を獲得した業者を選定したところである。

企画提案説明に対して、審査員からは児童生徒数の規模に応じた調整・対応は可能か、スタッフの支援体制などについて質問があった。

選定した株式会社ポータスの企画提案説明では、9月までのスケジュールについて、4月は各校を訪問し、オリエンテーションを実施、5月前半は管理者向け研修を教育研究センターで開催、5月後半から8月までは各校における教職員の集合研修、授業サポートの実施(訪問回数は各校3回程度)、9月は補足的な位置づけの研修を実施、全体の課題や今後の方向性の共有を図る内容の説明であった。

7つの評価項目のうち6つで1位、1つの評価項目で2位という結果であった。

今回の委託事業の実施目的は、子ども達に端末を1人1台配布することではなく、端末整備を行った後、どのように端末を効果的に活用して、子ども達の学力を向上させるか、教員の教える力を伸ばせるかなどが重要である認識している。

そのため、端末を効果的に活用する学校、うまく活用できない学校が出てくることのないよう、全ての学校において端末のセット、操作の習得、ICTの特性を上手に使いこなし、授業力の向上などに結び付くよう、「G I G Aスクール構想実現に係るプロジェクトチーム」や受託業者としっかり連携しながら、進めていきたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

ヘルプデスクの開設というのは、学校で実際運用してみて、基本的なものから専門的な部分まで、困った時にここに問い合わせればリアルタイムで援助してもらえるといるものか。

(早坂学校教育部長)

日中であればWEBでの対面式対応もあり、夜間であればメールでの受付もする。

(岡部教育長)

G I G Aスクールサポートサイトも立ち上げる予定である。おそらく各学校で特に開始当初は同様の疑問や質問が多く寄せられることから、このサイトでそれらを一括で回答しておき、そこを見ればおおよそ解決できるといった仕組みの構築についての提案も受けている。

【公開案件】報告事項

(8) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について

(澤口生涯学習課長)

ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について報告する。

4月24日から5月6日までの各施設の開館状況については、湿原の風アリーナ釧路、動物園、丹頂鶴自然公園などでは、休まずに開館する。後半の5月3日は、月曜日であるため市民文化会館や生涯学習センターは休館するものの、生涯学習センターにある市立美術館、博物館や中央図書館などは開館するとともに、5月4日、5日も、阿寒町、音別町の図書館以外は概ね開館となっている。各施設とも新型コロナウイルス感染症対策をしっかりと講じていく。

次に、主な施設での今年度の事業予定について、生涯学習センターでは、シニア講座等において、令和2年度に整備したW i - F iを活用し、スマートフォンを利用したZ O O MやY o u T u b eなどの使い方の基礎的な講座を盛り込むなど、時代に即した取り組みを進めていく。

また、釧路市立美術館では、今年度も特別展を3本予定し、現在、6月13日(日)まで、ピカソやユトリロらの海外の有名画家などの作品と、パレットに描かれた絵画などを合わせて展示する「巨匠とパレット 創作の秘密」を開催している。特にユトリロのパレットは世界に2つしかない作品を展示している。7月10日(土)から9月5日(日)まで、「ペキタと探検! ガラスの不思議 絵画とヴェネチアン・ガラスの世界」、9月28日(水)から11月14日(日)まで「上野憲男(うへの のりお)展」を開催する予定である。

ほかにも、釧路を描き続ける羽生先生の生誕80年を記念した「羽生輝(はにゅう ひかる)展」や、道展・釧路移動展、コレクション展、阿寒・音別地区への巡回展など、優れた作品を地元で鑑賞できる機会となっている。

次に、動物園では、4月29日から5月5日まで、春の動物園まつりを開催する。このうち、5月2日には、人気者のレッサーパンダの食べた竹を使って、ミニ竹ほうきを作ったり、5月5日こどもの日には、ふくろうの森のフクロウたちの羽を使った、自分だけのしおりを作ったりと、子どもたちに人気のあるワークショップを開催する。

このほか、今年度も感染防止対策を講じながら、できる範囲において、各種イベントを開催してまいりたいと考えている。

生涯学習施設の開館やイベント開催にあたっては、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、徹底した感染防止対策等を講じながら、利用者へも手洗いや咳エチケットの徹底や、「密集、密閉、密着」の3密を避けるお願いする中で、コロナ禍における社会活動を止めることなく、施設を活用した生涯学習の推進に取り組んでまいりたい。

◎この報告について、各委員からの発言なし。

【公開案件】報告事項

(9) 釧路叢書第40巻の発刊について

(澤口生涯学習課長)

釧路叢書第40巻「古文書に見る近代の釧路地方」の発刊について、生涯学習課より報告する。

釧路叢書については、これまでさまざまなジャンルを取り上げ、釧路市の郷土研究の解説書として長く愛されてきている。これまで39巻の発行をしており、3月31日に第40巻となる「古文書に見る近代の釧路地方」を発刊した。

釧路公立大学開学当時より釧路地方の歴史研究を続けてきた釧路公立大学 高嶋弘志（たかしま ひろし）名誉教授のこれまでの研究成果の集大成として、釧路が大きく躍進する出発点ともいえる明治・大正の出来事を古文書や当時の記録を丁寧に読み解き、明らかにするもので、釧路市の発展と周辺町村の発展を相互に関連付け、より多面的・多角的に捉えることで、内容に広がりを持たせた資料性の高い1冊となっており、4月26日より、1冊2,200円で市内書店や図書館等で販売を開始したいと考えている。

◎この報告について、各委員からの発言なし。